

Personal Report of Communication Apprehension (PRCA-24) を用いた質問紙調査における 肯定的表現もしくは否定的表現を含む項目への大学生の反応

物井尚子

千葉大学教育学部

University Students' Responses to Items which Include Either Positive or Negative Expressions in Personal Report of Communication Apprehension (PRCA-24)

MONOI Naoko

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では、Personal Report of Communication Apprehension (PRCA-24) (McCroskey, 2005) を用い、肯定的表現を含む質問項目と否定的表現を含む質問項目に対する反応の偏り（バイアス）の有無を、大学生の参加者として測定した。PRCA-24は語学学習者のコミュニケーションに対する不安感を測定する尺度であり、肯定表現を含む項目と否定的な表現を含む項目がそれぞれ12問、計24問からなる。参加者は84名の教育学部に在籍する学生であり、英語科に所属あるいは副専攻として学んでいる学生である。収集されたデータの分析は *t* 検定、ピアソン積率相関係数、検証的因子分析を用いた。その結果、尺度の一次元性は確認されたものの、質問項目の表現への偏りが学生の回答にも影響を及ぼしていることが確認された。

In this study, the author conducted a questionnaire called "Personal Report of Communication Apprehension" (PRCA-24) (McCroskey, 2005) to a group of university students in order to clarify whether they had response bias to items which include either positively-or negatively-worded expressions in the instrument. The PRCA is an instrument that measures language learners' communication apprehension when they use a target language. It is composed of 24 questions, 12 positively-worded and 12 negatively-worded questions. The participants were 84 university students who belonged to the English department or who majored in English education as their minor subject. The collected data were analyzed using a matched-paired *t*-test, Pearson product-moment correlation coefficient, and confirmatory factor analysis. As a result, the unidimensionality of the instrument was confirmed; in addition, the participants' response bias was found in negatively-worded and positively-worded questionnaire items.

キーワード：質問紙調査 (Analysis in Use of Questionnaires)

コミュニケーション不安 (Communication Apprehension)

表現の方向性による影響 (Direction of Wording Effects)

肯定・否定表現 (Positively or Negatively-Worded Expressions)

PRCA-24 (PRCA-24)

1. はじめに

「私はテニスが好きです」という問いに答える場合と「私はテニスが好きではありません」という問いに答える場合、それぞれの回答はどのようなものになるであろう。さらに「私はテニスが好きではありません」また「私はテニスが好きではありません」となるとさらに事は複雑になる。Schriensheim & Eisenbach (1995) は最初の問いを肯定的な（あるいは標準的な）表現を含む質問として a regular question と名付けている。それに対し、「嫌い」という反対の述語表現を含む質問項目は a polar opposite question と表現される。一方、最初の a regular question を否定

語を用いて打ち消した質問は a negated regular question と定義される。否定語が入ることで、回答者の反応も少なからずマイナスの要素に引きずられやすくなる。さらに、a polar opposite question を否定語を用いて打ち消す a negated polar opposite question の存在がある。文中に「嫌いでないことはない」という二重否定が生じ、述語表現のもつ否定的な意味合いは打ち消され、肯定表現となる。このような多様な表現に対し、回答者はぶれることなく、自らの考えを表現できるものであろうか。この問いに答えることが本研究の目的である。

物井(2014)では、110名の小学5年生に対し、Personal Report of Communication Apprehension (PRCA-24) (McCroskey, 2005) (資料) という成人用のコミュニケーションの不安感を測定するための尺度を平易な表現

連絡先著者：物井尚子 nmonoi@faculty.chiba-u.jp

に置き換え、また児童の学習言語使用場面を考慮して質問数を減らした尺度を作成し、同様の調査を行った。その結果、児童は質問項目の持つ表現の方向性に大きく影響されることが分かった。今回は対象を大学生として、児童との反応の類似性（あるいは独自性）を検討する。

2. 先行研究

本章では、質問紙調査、特に情意面の調査におけるメリット・デメリットについて議論し、次に質問紙項目における反応バイアスについて先行研究をまとめる。

2.1 質問紙調査のメリット・デメリット

Dörnyei (2003) は、質問紙調査について、研究者の時間、研究者の（目標を達成するまでに使われる）精神的・肉体的エネルギー、財政面の3点からその効率性を高く評価している。その一方で、数多くの問題点も多くの研究者が指摘している。とりわけ問題となるのが、Oppenheim (1992) が取り上げるように「気づき、態度、認識、信条のような情意面を測定するのに質問紙を使用した場合、類似して見える質問項目が全く異なった回答結果を得る場合が存在する (p. 149, 筆者訳)」ということである。

その理由の一つとして考えられるのは、質問項目の表現がもつ方向性が回答を誘導する場合が存在するからである。例えば、質問紙法の性格検査の項目は文章や特性語を用いて表現され、それらへの反応を通して参加者の性格特性を明らかにするわけであるが、その場合、社会的望ましさとという視点で肯定的に表現した場合と否定的に表現した場合の反応の違いである「反応バイアス」(塗師, 2004, p. 2) が参加者の回答に表れることが確認されている。また、読解力に関する自己認識の調査において、肯定的表現を含む質問項目には、否定的表現を含む質問項目よりも多くの参加者が「はい」と回答するような状況が報告されている (Chapman & Tunmer, 1995)。また別の質問紙調査では、否定的表現を含む質問項目でより同意を示すという報告もなされている (Marsh, 1996; 物井, 2014)。

この回答の偏りを解消するために、一つのことを問う場合にも複数の項目を用意してたずね方に表現の幅を持たせることが多くの研究者によって提唱されてきた (Dörnyei, 2003; Gillham, 2000; Oppenheim, 1992)。特に、肯定的表現と否定的表現を含む質問項目の両方をバランスよく質問紙に取りこむことで、“acquiescence bias” —どの種の事柄についても、質問されたことにはとりあえず賛成しておく、また聞こえが良い質問項目についてはすぐに賛成してしまうという人々の傾向 (Robinson, Shaver & Wrightsman, 1991, p. 8)、あるいは、否定的な側面を見ようとしない、もしくは過度に否定的な言い回しについては同意しないというような人々の傾向からくる調査結果への悪影響を最小限に抑えることができると考えられてきた。(Fallowfield, 1995; Locker, Jokovic & Allison, 2007; Schriensheim & Eisenbach, 1995; 清水・吉田, 2008)。

2.2 質問紙項目における反応バイアスに関する調査

ただし、その効果においては、年齢は考慮すべき要因の一つであり、ある程度の発達段階に至らない参加者については肯定・否定の両方の表現を混在させることにより混乱を招くことが指摘されている (Chapman & Tunmer, 1995; Marsh, 1986, 物井, 2014)。Marsh (1986) ではさらに読解力との関係を取り上げ、読解力に乏しい参加者 (小学5年生599名) は否定的な表現を含む質問項目に対して適切に答えられなかったとしている。

それでは、知的に発達した学習者は表現の影響を受けるのであろうか。Marsh (1996) は24,599名の中学2年生に対してRosenberg's Self-Esteem Scale (Rosenberg, 1965) を実施し、その回答を検証的因子分析を用いて解析した。この尺度は自尊感情という心的概念を測定する尺度である。5問の否定表現を含む質問項目と5問の肯定表現を含む質問項目、計10問から成る尺度であり、その実用性の高さから広く普及している。調査の結果、因子分析によって尺度の次元性は確保されたが、質問項目の表現に影響を受けたmethod effects (measurement error) と考えられる特殊因子が見受けられた。

清水・吉田 (2008) は、617名の大学1年生を参加者としてRosenberg's Self-Esteem Scale (Rosenberg, 1965) を実施し、その回答を多特性—多方法 (multitraits-multimethods: MTMM) を用い、13種類のモデルから最適なものを判断するという方法により分析を行った。その結果、一つの一般的自尊感情因子の他に、肯定的表現と否定的表現の2つの特殊因子からなるモデルが、13種類のモデルの中では最も良い適合度を示したこと、また4つの独自性間共分散を追加して推定したモデルが最高の適合度となったことを明らかにした。その理由は、否定的に表現された一項目が、一般自尊感情因子と、さらに独立して、否定特殊因子と正の関係を見せたことによると説明している。この結果は、先のMarsh (1996) の調査における質問項目の表現の方向性が回答に影響を与えるというmethod effectsが、大学生を対象とした調査でも確認されたことを意味する (Tomás & Oliver, 1999; 田中・前田, 2004)。田中・前田 (2004) は自らの研究で「ポジティブな質問項目に比べて、ネガティブな質問項目に対する回答の相対的不適格さによって誤差が生じ、その結果、相関の希薄化を生起させる (p. 131)」と説明している。

これらの研究成果を踏まえ、今回の調査では、大学生という年齢層の学習者において、自尊感情以外の概念、コミュニケーション不安に関する質問紙調査においても質問項目の肯定的表現、そして否定的な表現の方向性が回答に影響するのかを調査する。

3. 研究課題

本研究では、先行研究を踏まえ、3つの研究課題を設定する。

- 1) 大学生の参加者は、肯定的表現を含む質問項目と否定的表現を有する質問紙 (PRCA-24) にどう反応するのか。
- 2) 参加者の肯定表現を含む質問項目に対する反応と否定表現を含む質問項目に対する反応の間に相関は見ら

れるか。

- 3) 参加者の回答から、PRCA-24は一次元性を確立できるか。

4. 調査

4.1 参加者

本調査における参加者は、教育学部小学校教員養成課程小学校英語選修および中学校教員養成課程英語専攻に所属する学生、および副専攻もしくは基礎免許として英語を選択した他専攻の学生、長期研修生等の社会人を含む計84名である(表1, 2参照)。彼らは、英語教育を専門に勉強しており、またTOEFLスコアも500点を超える者が半数以上である。

表1 参加者の課程別内訳

課程 (N=84)	小学校	38
	中学校	25
	他専攻	19
	社会人	2

表2 参加者の学年別内訳

学年 (N=84)	1年	35
	2年	33
	3年	6
	4年	7
	5年生以上	3

4.2 PRCA-24

本研究では、質問紙としてPersonal Report of Communication Apprehension (PRCA-24) (McCroskey, 2005)を使用した。Communication Apprehensionとは、個人が他者とのコミュニケーション場面を経験した後、もしくはその場면을想像することで感じる恐怖もしくは不安感情を指す言葉 (Beatty, McCroskey & Heisel, 1998) である。

PRCA-24 (McCroskey, 2005; National Communication Association, 2007) はこの不安感情を測定するために作られた尺度である。尺度の妥当性、信頼性が高いこと、そして質問数が比較的少ないために短時間で実施できることから、広汎に利用されている。尺度は24問の構成であり、また不安感情は場面に伴って変化するというMcCroskey (2005) のCommunication Apprehensionの捉えから、グループ・ディスカッション、会議(グループ・ディスカッションよりも多い人数の中でのやりとり)、一対一、演説の4場面それぞれ6問が用意されている。質問は全て5件法での回答が求められる。場面ごとに18点の部分点が予め与えられており、そこから否定的な項目に対する回答は引き算、肯定的な項目に対する回答は足し算をし、合計点を算出する。24~120点の間で得点化されることになる。

今回の調査でこの尺度を選択した理由であるが、コミュニケーションにおける不安感情という概念を問う質問項目が肯定的表現を含む12問、否定的表現を含む12問

と同数存在し、表現の違いによる質問内容への参加者の反応を比較しやすいことである。例えば、グループ・ディスカッションの場面における質問の一つに“I dislike participating in group discussions.” (Q1)がある。この問いと対になる質問として“I like to get involved in group discussions.” (Q4)が用意されている。このように主に述部の表現を対比させながら、各項目に対する反応を見ることが容易である。

また、参加者は本学部の英語科もしくは英語を専門的に勉強しようとする学生であるため、一定の英語力が担保されるものと判断し、質問紙は英語のままとした。

4.3 手順

データは2年間にわたって収集された。初年度は2014年5~6月、前期に開講した4クラスの中で配布された。次年度は2015年7月、前期に開講した2クラスの中で配布された。調査の主旨に賛同するものは、2014年度は授業内で、2015年度は授業外で各自が記入し、研究者に提出する形をとった。参加者によれば、記入には15~20分程度を要したとのことであった。

調査は記名、無記名を選択できる形をとった。84名中、8名が無記名であった。

5. 結果と考察

本節では、調査の結果を研究課題に沿って詳述する。

5.1 大学生の参加者は、肯定的表現を含む質問項目と否定的表現を含む質問項目を有する質問紙 (PRCA-24) にどう反応するのか。

参加者の反応を分析する前に、否定的な表現を含む全12項目の数値を逆転させた。次に、参加者の反応を肯定的表現と否定的表現の12の組み合わせごとにまとめたものが図1である。これを見ると、参加者が肯定的な表現を含む質問項目の平均 ($M_p=2.53$) よりも否定的な表現を含む質問項目の平均 ($M_N=2.87$) に対してより同意を示していることがわかる。これは Marsh (1986)、物井 (2014) を支持する結果になった。

次に、4場面ごとの参加者の反応を見ていく。グループ・ディスカッションという場面でのコミュニケーション不安は $M=2.39$ 、会議の場面では $M=2.28$ 、一対一の場面では $M=2.40$ 、最後に演説の場面では $M=2.17$ とい

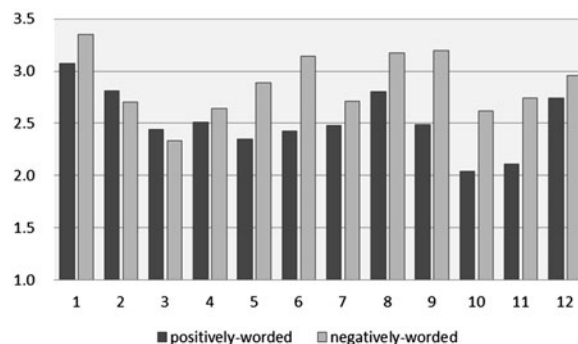


図1 肯定的および否定的表現を含む12組の質問項目への参加者の反応

う結果になった。繰り返しになるが、参加者は、英語教育を専門に勉強しており、またTOEFLスコアも500点を超える者が半数以上である。そのような学生たちにとって、グループ・ディスカッション、一対一の場面は、聞き手の数が少ないので、相手の理解を確認しながら、会話を進められるという点を生かせるからであるのか、4場面においてはやや不安感が低いことが確認された。一方、演説や会議という場面では、聞き手の数が増え、個別の対応が難しいことが予測され、より正確に、伝わりやすい英語を話すことが求められる。そのような気負いからか、これら2場面での不安感がやや高くなった。

5.2 参加者の肯定的表現を含む質問項目に対する反応と否定的表現を含む質問項目に対する反応の間に相関は見られるか。

次に、12の肯定的な表現で尋ねた質問と否定的な表現で尋ねた質問への反応について5%水準で対応のあるt検定を行った。その結果をまとめたものが表3である。この結果、12項目のうち、7項目において統計的な有意差が確認された。場面ごとの傾向は見られず、各場面の1~2項目に有意差の生じた項目が散見された。

また、否定的表現を含む12項目と肯定的表現を伴う12項目全体のピアソン積率相関係数を求めたところ、その数値は $r=.50$ と中程度の相関がみられた。これは、物井(2014)の小学生を対象とした結果 $r=.38$ を上回る数値であり、回答者の発達段階の影響を裏付ける結果になったといえる。次に、肯定的表現を含む質問項目とその否定的表現を含む質問項目の12組の相関をそれぞれ計算した(表4)。その結果、最も相関が高いのは、P8 (Ordinarily I am very calm and relaxed in conversations.)とN8 (Ordinarily I am very tense and nervous in conversations.)で $r=.69$ という数値を示した。最も相関が低いのはP10 (I have no fear of giving a speech.)とN10 (Certain parts of my body feel very tense and rigid while giving a speech.)であり、 $r=.10$ という数値になった。演説に関する不安

表3 12の問いに関する表現の違いによる質問項目の対応のあるt検定結果(場面別)

		平均	標準偏差	t値	自由度	有意水準
グループ・ディスカッション	Pair 1	.27	.99	2.55	83	.01*
	Pair 2	-.11	1.21	-.81	83	.42
	Pair 3	-.11	.98	-1.00	83	.32
会議	Pair 4	.13	.89	1.35	83	.18
	Pair 5	.55	1.21	4.16	83	.00*
	Pair 6	.71	1.21	5.42	83	.00*
一対一	Pair 7	.13	1.15	1.05	83	.30
	Pair 8	.37	.77	4.38	83	.00*
	Pair 9	.71	1.19	5.46	83	.00*
演説	Pair10	.52	1.18	4.51	83	.00*
	Pair11	.63	1.12	5.18	83	.00*
	Pair12	.27	1.2	1.73	83	.09

注. * = 5%水準で統計的有意差が見られた項目。

表4 12組の表現の違いによる質問項目の相関

	項目	平均値	標準偏差	N	相関係数	有意確率
Pair 1	N 1	3.35	.99	84	.438	.00
	P 1	3.07	.86	84		
Pair 2	N 2	2.70	1.02	84	.211	.05
	P 2	2.81	.91	84		
Pair 3	N 3	2.33	.91	84	.391	.00
	P 3	2.44	.87	84		
Pair 4	N 4	2.64	1.03	84	.545	.00
	P 4	2.51	.78	84		
Pair 5	N 5	2.89	1.10	84	.274	.01
	P 5	2.35	.88	84		
Pair 6	N 6	3.14	1.05	84	.250	.02
	P 6	2.43	.91	84		
Pair 7	N 7	2.61	.96	84	.224	.04
	P 7	2.48	.88	84		
Pair 8	N 8	3.17	1.05	84	.690	.00
	P 8	2.80	.86	84		
Pair 9	N 9	3.20	.99	84	.267	.01
	P 9	2.49	.99	84		
Pair10	N 10	2.62	.99	84	.099	.37
	P 10	2.04	.75	84		
Pair11	N 11	2.74	1.01	84	.237	.03
	P 11	2.11	.78	84		
Pair12	N 12	2.96	1.06	84	.131	.23
	P 12	2.74	.71	84		

注. P1~P12=肯定的表現を含む項目, N1~N12=否定的表現を含む項目。

があることと、演説をする際に緊張して硬くなってしまおうというのと同じではないという感覚をもった参加者が多かったことになる。同様にPair 12も相関の低い組み合わせ($r=.13$)であるが、P12 (I face the prospect of giving a speech with confidence.)とN12 (While giving a speech, I get so nervous I forget facts I really know.)の組み合わせが示すように、演説の際、緊張して知っているすべてのことを忘れてしまう、という感覚と英語で演説ができるということに関する自信の乏しさ、ということとは必ずしも同じ時点で起こるものではない、という項目の並びのずれが見て取れる。

ちなみに、全24項目の信頼性係数はCronbach's $\alpha=.90$ となった。否定的表現を含む12項目のみを取り出した際の信頼性係数はCronbach's $\alpha=.85$ 、一方、肯定的表現を含む12項目の信頼性係数はCronbach's $\alpha=.83$ となり、いずれの数値も総じて高い値を得た。ここから、表現によって参加者の回答に異なる部分があるものの、肯定的表現、否定的表現を含むそれぞれの質問群の間に一定の相関がみられたことから、質問群全体ではCommunication Apprehensionという一つの心的概念を捉えられていると考えられる。この点について次節で分析を深める。

5.3 参加者の回答から、PRCA-24は一次元性を確立できるか

参加者84名の質問紙の回答について、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行ったところ、固有値1以上の7因子を得た。スクリー基準をもとに固有値の落差、因子の項目内容を考慮した上で4因子解を採用した。その際の累積寄与率は45.91%であった。因子分析の結果を表5に示す。表の項目は第1因子から第4因子の因子負荷量の絶対値の降順となっている。

第1因子は、N5、N9～N12の否定的表現を含む5項目とP6～P8の肯定的表現を含む3項目から構成されている。因子の信頼性係数は $\alpha = .82$ と高い数値を示した。演説、会議、1対1の会話の場面から項目が寄与しているのが特徴的である。項目の中にはexpress myself, speak up, giving a speechのように自分から話を切り出すことを示す動詞が散見され、これらの表現に対するマ

表5 PRCA-24の因子分析結果（パターン行列）

	因子			
	1	2	3	4
P 9 (18)	.755			
P 10 (20)	.655			
P 6 (12)	.634			
P 8 (16)	.631			
P 5 (10)	.542			
P 7 (17)	.538			
P 11 (22)	.477			
P 12 (24)	.384			
N 4 (7)		1.021		
N 7 (13)		.902		
P 4 (8)		.441		
N 2 (2)		.439		
N10 (19)				
N 5 (9)			.771	
N12 (23)			.638	
N11 (21)			.545	
N 9 (14)			.530	
N 6 (11)			.440	.374
N 8 (15)	.361		.438	
P 1 (4)				.775
P 2 (3)				.672
N 1 (1)				.642
P 3 (6)				.405
N 3 (5)				.371
固有値	7.42	2.33	1.90	1.55
分散の%	30.91	9.71	7.93	6.46
信頼性係数	.82	.84	.79	.77

注1. P1～P12=肯定的表現を含む項目、N1～N12=否定的表現を含む項目。

注2. 因子負荷量が±.350以上のものを表に示している。

イナスの感情が見られた。同時に、少人数でのやりとりが期待されるものについては肯定的な感情を示している。よって第1因子は「英語で話を始めることへのマイナスの感情」と命名した。

第2因子は、N4、N7、P2、P4という4項目から構成されている。因子の信頼性係数は $\alpha = .84$ と高い数値を示した。これらの項目に共通するのは、比較的少人数の「インフォーマルな場面でのコミュニケーションに対する感情」と見ることができる。

第3因子は、P5、P9、P11、P12の肯定的表現を含む4項目とN6、N8という2項目から構成されている。信頼性係数は $\alpha = .79$ を示した。この因子は第1因子の裏返しと捉えられ、演説、会議、1対1の会話の場面から項目が寄与している。項目の中にWhen I am called upon to express an opinion, communicating at meetings, in conversationsなど、自らが口火を切ることはとくに期待されない表現が見受けられ、肯定的な感情表現が伴うことが確認された。よって第3因子は「英語でのやり取りへのプラスの感情」と命名した。

最後に第4因子であるが、P1、P3、N1～N3のグループ・ディスカッションという場面でのコミュニケーションの不安をたずねる5項目から構成される。よって「グループ・ディスカッションの場面での感情」と見ることができる。この結果を踏まえ、次節では考察を行うことにする。

6. 考 察

本研究では、質問紙における質問項目の表現が肯定的なものとするものと否定的なものとするものが大学生の回答にもたらす偏り（バイアス）（水本・竹内, 2015, p. 163）を探るために、84名の学生のコミュニケーション不安に関する質問紙調査を実施し、得られたデータに対して t 検定、相関、そして検証的因子分析を行った。その結果、否定的表現を含む質問項目に対しての学生の回答が、肯定的な表現を含む項目を全般的に上回る結果になった。本調査では、学生が否定的な表現を含むコミュニケーション不安に関する質問に対してより強く同意する傾向が見られた。また肯定・否定の12組の質問項目それぞれについて t 検定を行ったところ、7組において統計的な有意差が生じた（表3）。なお、肯定的表現と否定的表現を含む項目の組み合わせ12組全体の相関は $r = .50$ となり、中程度の相関がみられた。さらに、全24項目の信頼性係数はCronbach's $\alpha = .90$ となった。否定的表現を含む12項目、肯定的表現を含む12項目のみを取り出した際の信頼性係数はそれぞれ $\alpha = .85$ 、 $\alpha = .83$ となり、先の値とほぼ同値となった。

12組それぞれの相関については、 $.09 < r < .69$ と大きな開きが確認された。このことは、質問項目の文言の組み合わせが必ずしも二項対立になっていないことがあげられる。tense and nervousとcalm and relaxedのような二極を意識しやすい表現だけでなく、I face my prospect of giving a speech with confidence. とI forget everything I know when I am nervous.のように同じ物差しで測ることが常でない事柄の対比も見られた。ただ

し, McCroskey (2005) も尺度を公表する上で, その否定・肯定の組み合わせ, そしてその表現によって生じる回答の偏りについては言及していないことから, 各場面における6つの質問項目全体でバイアスを相殺するよう意図しているのではないかと考えられる。このことは, 否定的表現を含む12項目, 肯定的表現を含む12項目の信頼性係数がそれぞれ $\alpha > .80$ を超える高いものであることが後ろ盾になるだろう。

因子分析では4因子が抽出された。4場面によるコミュニケーション不安の異なりが因子に反映されると予測したが, そうではなかった。コミュニケーションに対する肯定的, そして否定的な感情の共起が浮き彫りになった。そしてその同時性を際立たせていたのは, フォーマル, インフォーマルという言葉で表されるかしまりの度合い, あるいは, 英語でのやり取りを自らがリードする必要性を求められるか否か, その要求と結びつくプラス, マイナスの感情と考えられる。

要約すると, 肯定的表現, 否定的表現を含む質問群全体に高い内の一貫性がみられたことから, 質問群全体ではL2を使用する際のコミュニケーション不安という概念を包括的に捉えられていると判断できる。しかし, 因子分析の結果に, 否定的表現そして肯定的表現の影響が見られる第1因子, 第3因子の存在が確認され, 全体としても4因子解が採用されたことから, 肯定的表現と否定的表現を含む質問項目の混在によって「相関の希薄化」(田中・前田, 2004, p. 131)が生じ, 本来1因子であるはずの構成概念が分離したことが考えられる。この点については引き続きの調査が必要であろう。

7. まとめ

大学生を対象とした今回の調査によって, 質問紙における質問項目の表現を肯定的なものとするか否定的なものとするかという回答にもたらす偏りを探った。児童を対象にした場合(物井, 2014)と異なり, PRCA-24の示す次元性が確認されたこと, ただし, 否定表現, 肯定表現を混在させることでの反応バイアスが生じ, 安易な使用を危険視する必要性が明らかになった。水本・竹内(2015)が指摘するように成人が対象であっても, 安易に否定的な表現を含むことは避け, 可能であれば肯定的表現に修正したうえで使用することが望ましいだろう。ただし, サンプルサイズが小さい調査であったことから, 引き続きの研究の必要性を痛感する。

謝 辞

本研究のアンケート調査に快く協力した英語科の学生に心より感謝する。この場をかりてお礼を申し上げたい。

引用文献

清水和秋・吉田昂平(2008). 「Rosenberg自尊感情尺度のモデル化—wordingと項目配置の影響と検討—」 関西大学『社会学部紀要』第39巻第2号, 69-97.
田中博晃・前田哲朗(2004). 「外国語学習動機研究にお

ける構成概念 ‘amotivation’—測定の妥当性検証とネガティブな質問項目の影響」*JLTA Journal*, 6, 128-139.
塗師斌(2004). 「性格検査項目における社会的望ましさの肯定的あるいは否定的表現による反応バイアス」『横浜国立大学教育人間科学部紀要』I, 教育科学6, 1-11.
水本篤・竹内理(2012). 『外国語教育研究ハンドブック—研究手法のより良い理解のために—』東京: 松柏社.
物井尚子(2014). 「質問紙における肯定, 否定の項目表現が児童の回答にもたらす影響」『日本児童英語教育学会研究紀要』第33号, pp.23-37.
Beatty, M. J., McCroskey, J. C., & Heisel, A. D. (1998) Communication apprehension as temperamental expression: A communibiological paradigm. *Communication Monographs*, 65, 197-219.
Chapman, J. W., & Tunmer, W. E. (1995). Development of young children's reading self-concepts: An examination of emerging subcomponents and their relationship with reading achievement. *Journal of Educational Psychology*, 87(1), 154-167.
Dörnyei, Z. (2003). *Questionnaires in second language research: Construction, administration, and processing*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
Fallowfield, L. (1995). Questionnaire design. *Archives of Disease in Childhood*, 72, 76-79.
Gillham, B. (2000). *Developing a questionnaire*. London: Continuum
Locker, D. Jokovic, A., & Allison, P. (2007). Direction of wording and responses to items in oral health-related quality of life questionnaires for children and their parents. *Community Dent Oral Epidemiol*, 35, 255-262.
Marsh, H. W. (1986). Negative item bias in ratings scales for preadolescent children: A cognitive developmental phenomenon. *Developmental Psychology*, 22(1), 37-49.
Marsh, H. W. (1996). Positive and negative global self-esteem: A substantively meaningful distinction or artifacts? *Journal of Personality and Social Psychology*, 70(4), 810-819.
McCroskey, J. C. (2005). *An introduction to rhetorical communication* (9thed). Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
National Communication Association. (2007). *Assessing motivation to communicate: Willingness to communicate and personal report of communication apprehension* (2nded). Washington, DC: Author.
Oppenheim, A. N. (1992). *Questionnaire design, interviewing and attitude measurement* (New Edition). London: Pinter.
Robinson, J. P., & Shaver, P. R., & Wrightsman, L. S. (1991). Criteria for scale selection and evaluation. In J. P. Robinson, P. R. Shaver & L. S. Wrightsman (Eds.), *Measures of personality and social psychological attitudes* (pp. 1-16). San Diego, CA: Academic Press.

- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Schriensheim, C. A., & Eisenbach, R. J. (1995). An exploratory and confirmatory factor-analytic investigation of item wording effects on the obtained factor structures of survey questionnaire measures. *Journal of Management*, 21(6), 1177-1193.
- Tomás, J. M., & Oliver, A. (1999). Rosenberg's self-esteem scale: Two factors or method effects. *Structural Equation Modeling: A Multidisciplinary Journal*, 6(1), 84-98.

資料. Perceived Report of Communication Apprehension (PRCA-24)

Directions: This instrument is composed of 24 statements concerning feelings about communicating with others. Please indicate the degree to which each statement applies to you by marking whether you:

Strongly Disagree=1; Disagree=2; are Neutral=3; Agree=4; Strongly Agree=5

- ___ 1. (N1) I dislike participating in group discussions.
- ___ 2. (P2) Generally, I am comfortable while participating in group discussions.
- ___ 3. (N2) I am tense and nervous while participating in group discussions.
- ___ 4. (P1) I like to get involved in group discussions.
- ___ 5. (N3) Engaging in a group discussion with new people makes me tense and nervous.
- ___ 6. (P3) I am calm and relaxed while participating in group discussions.
- ___ 7. (N4) Generally, I am nervous when I have to participate in a meeting.
- ___ 8. (P4) Usually, I am comfortable when I have to participate in a meeting.
- ___ 9. (P5) I am very calm and relaxed when I am called upon to express an opinion at a meeting.
- ___ 10. (N5) I am afraid to express myself at meetings.
- ___ 11. (N6) Communicating at meetings usually makes me uncomfortable.
- ___ 12. (P6) I am very relaxed when answering questions at a meeting.
- ___ 13. (N7) While participating in a conversation with a new acquaintance, I feel very nervous.
- ___ 14. (P9) I have no fear of speaking up in conversations.
- ___ 15. (N8) Ordinarily, I am very tense and nervous in conversations.
- ___ 16. (P8) Ordinarily, I am very calm and relaxed in conversations.
- ___ 17. (P7) While conversing with a new acquaintance, I feel very relaxed.
- ___ 18. (N9) I'm afraid to speak up in conversations.
- ___ 19. (P10) I have no fear of giving a speech.
- ___ 20. (N10) Certain parts of my body feel very tense and rigid while giving a speech.
- ___ 21. (P11) I feel relaxed while giving a speech.
- ___ 22. (N11) My thoughts become confused and jumbled when I am giving a speech.
- ___ 23. (P12) I face my prospect of giving a speech with confidence.
- ___ 24. (N12) While giving a speech, I get so nervous I forget facts I really know.

Note. The numbers in the brackets were added by the author.

SCORING:

Group Discussion: 18-(scores for items 2, 4, & 6)+(scores for items 1, 3, & 5)

Meetings: 18-(scores for items 8, 9, & 12)+(scores for items 7, 10, & 11)

Interpersonal: 18-(scores for items 13, 15, & 18)+(scores for items 14, 16, & 17)

Public Speaking: 18-(scores for items 19, 21, & 23)+(scores for items 20, 22, & 24)

Group Discussion Score: _____

Interpersonal Score: _____

Meetings Score: _____

Public Speaking Score: _____

To obtain your total score for the PRCA, simply add your sub-scores together. _____

Scores can range from 24-120. Scores below 51 represent people who have very low CA. Scores between 51-80 represent people with average CA. Scores above 80 represent people who have high levels of trait CA.

NORMS FOR THE PRCA-24: (based on over 40,000 college students; data from over 3,000 non-student adults in a national sample provided virtually identical norms, within 0.20 for all scores.)

Mean	Standard Deviation	High	Low
Total Score: 65.6	15.3	>80	<51
Group: 15.4	4.8	>20	<11
Meeting: 16.4	4.2	>20	<13
Dyad (Interpersonal) : 14.2	3.9	>18	<11
Public: 19.3	5.1	>24	<14